

# 箕輪遺跡

平成20年度タイヤ館建設工事に伴う  
埋蔵文化財第23次緊急発掘調査報告書



2009年

ブリヂストンタイヤ長野販売株式会社  
長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

# 箕輪遺跡

平成20年度タイヤ館建設工事に伴う  
埋蔵文化財第23次緊急発掘調査報告書

2009年

ブリヂストンタイヤ長野販売株式会社  
長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

## 序

箕輪遺跡は、上伊那郡下において唯一確認されている大農耕遺跡として世に知られ、先人たちの暮らしを支えた農耕文化を伝える貴重な文化財の一つであります。この遺跡が注目されたのは、昭和26年に始まった大規模な土地改良工事の中で、稲作に使われた木製農具やたくさんの土器や石器の出土とともに、それまで県内では例のない水田跡の発見です。そして、この事実にいち早く着目した地元の歴史研究者たちの手により、地道な遺物の採取と記録作業が行われ、遺跡の全貌が明らかとなり、世に知られることとなりました。

町教育委員会が実施した発掘調査は、昭和55年の調査を最初に、今回で23次を数えることになりました。また、平成12・13年に実施された(財)長野県埋蔵文化財センターによる国道バイパス建設工事関連の調査では、各時代の水田跡や集落址の発見がありました。そして、遺跡が跨る南箕輪村地籍においても同教育委員会の手により調査が行われています。これまでの得られた多くの成果から、徐々に遺跡の性格が明らかになってきています。しかし、その反面度重なる開発により、遺跡が危機にさらされているのも事実です。今後、この遺跡を保護し、後世に伝えていくことが我々に科せられた大きな責務であります。

調査の成果につきましては、本書の中で詳細に記しておりますので、広く活用していくだけ、これから地域発展の一助となれば幸いであります。

なお、今回の調査を行えましたのは、貴社の郷土の文化財保護に対する多大なるご理解とご協力の賜物です。本書の刊行をもちまして、改めて感謝の意を表するものであります。また、各方面でご指導ご協力をいただきました、地域並びに調査関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

箕輪町教育委員会  
教育長 小林通昭

## 例　　言

- 1 本書は、店舗建設工事に先立って実施した、長野県上伊那郡箕輪町大字三日町 964 番地 1 他に所在する、箕輪遺跡の第 23 次緊急発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の発掘調査及び整理作業に係る記録保存業務は、ブリヂストンタイヤ長野販売株式会社から委託を受け、箕輪町教育委員会が行った。
- 3 本書の作成にあたり、作業分担を以下のとおりに行った。

遺物の洗浄・注記	大串久子、根橋とし子
遺構図の整理・トレース	井沢はずき、根橋とし子
遺物の実測・拓本・トレース	井沢はずき、大串久子
挿図作成	井沢はずき、大串久子、根橋とし子
写真撮影・図版作成	赤松 茂、根橋とし子
- 4 本書の執筆は、赤松 茂、根橋とし子が行った。
- 5 本書の図集は、赤松 茂、柴 秀穂、根橋とし子が行った。
- 6 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。
- 7 調査及び本書の作成にあたり、下記の方々並びに機関からご指導ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

春日史朗／友松瑞鳳／(株)浅川建設工業／(財)長野県埋蔵文化財センター／三日町区  
南箕輪村教育委員会／箕輪町歴史同好会

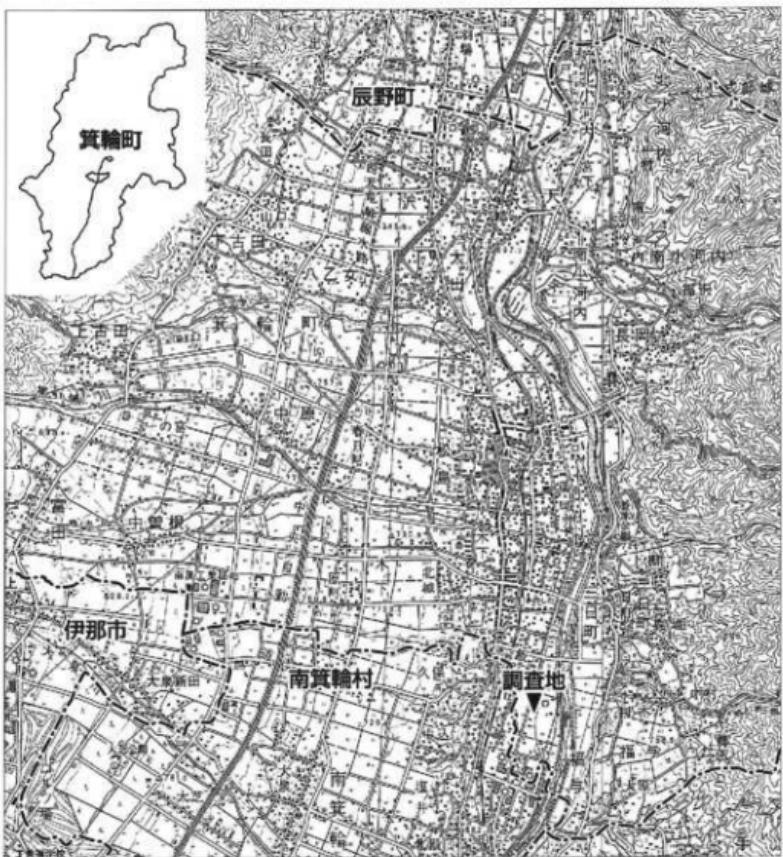
## 凡　　例

- 1 挿図
  - 挿図の縮尺は、各図表題または右下に表記（スケールを有するものも含む）した。
  - 遺物実測図及び拓影図は、以下の縮尺に統一した。  
木器実測図—1:5、土器実測図—1:4、石器実測図・土器拓影図—1:3
  - 遺構実測図中におけるスクリーントーン及び記号による表示は、各図に凡例を設けているので参照されたい。
- 2 土層及び遺物観察
  - 土層及び土器の色調は、『新版 標準土色帖』を用いて記してある。
  - 出土土器観察表の法量は、上から「口径・底径・器高」の順に記し、単位はセンチメートル(cm)で、「( )」は残存値、「( )」は推定値、「—」は計測不能を意味し、重量の単位はグラム(g)である。
  - 出土土器観察表の法量は、単位はセンチメートル(cm)で、「( )」は残存値、「( )」は推定値、「—」は計測不能を意味し、また重量はグラム(g)で表し含水した値を計測した。

# 本文目次

---

●序	
●例　言・凡　例	
●本文目次	
 ●第1章　発掘調査の概要	1
●第1節　調査に至る経過	1
●第2節　調査概要と体制	1
●第3節　調査日誌	2
 ●第2章　遺跡の環境	3
●第1節　地形と地質	3
●第2節　歴史環境	4
 ●第3章　発掘調査の結果	7
●第1節　調査方法	7
●第2節　土層堆積状況	9
●第3節　遺構と遺物	10
 ●第4章　総括	17
●報告書抄録	



第1図 調査位置図 (1:20,000)

# 第1章 発掘調査の概要

## 第1節 調査に至る経過

箕輪遺跡は、縄文時代の終末期に本国にもたらされた稲作による農耕文化が全国に波及し、各地域で独自の文化圏を形成し始めた弥生時代前期の後半段階に、その初源を探ることができる。しかし、遺跡からはそれより遙か以前、縄文時代早期からの遺物も多数発見されており、一帯が天童川の氾濫原であるにもかかわらず、古くから人々の暮らしに欠かせない重要なエリアであったことが伺える。

現在は、戦後に行われた耕地整理を経て新たな水田地帯となっているが、工業を主とする産業の発展と同時に人口増加も進み、宅地化とそれに伴う道路整備も進んできている。時に、遺跡中央を南北に縦走する国道153号線伊那バイパスが、(財)長野県埋蔵文化財センターによる緊急発掘調査を経て、平成15年秋に三日町地籍から南箕輪村を越える区間で供用開始となった。そしてそれを契機に、道路の隣接地において各種の出店が進み、町内では近年開発が集中する地域となってきている。

今回、ブリヂストン長野販売株式会社が、2,246m<sup>2</sup>を用地とするタイヤ及び自動車関連商品販売の店舗を建設することになった。平成20年1月に、同社開発事業担当部局から具体的な開発計画の提示があり、事業計画地が本遺跡包蔵地内にあたることから、文化財の保護に対して町教育委員会との間で協議を重ねてきた。そして同年2月、「埋蔵文化財発掘の届出」を受け、3月に文化財の有無と内容を確認するため試掘調査を実施した。

その結果、用地内に遺構と遺物が確認されたため、4月18日に再度2者間による保護協議を行ない、店舗の基礎工事によって破壊が余儀なくされる範囲において発掘調査による記録保存を図り、残る駐車場他は盛土による遺構の保護を行なうこととなった。

発掘調査は、同社の文化財の保護に寛大なるご理解ご協力により、同社から調査業務を委託された町教育委員会が実施することとなった。

## 第2節 調査概要と体制

- 1 遺跡名 箕輪遺跡（みのわいせき）
- 2 所在地 長野県上伊那郡箕輪町大字三日町964-1番地他
- 3 事業期間 平成20年3月6日～21年3月27日  
(試掘調査期間 20年3月6日～20年3月13日)  
(発掘調査契約期間 20年4月25日～21年3月27日)
- 4 調査団  
調査团长 小林通昭  
調査副团长 中村文好 唐澤清志  
調査担当者 赤松 茂  
調査員 柴 秀穂 横橋とし子 岡田和弘

調査団員 井沢はづき 伊藤輝彦 今関貞夫 大串 進 大串久子  
 小川陽三 春日誠子 川合佐一 唐沢清光 小松峰人  
 松崎仲子 向山英人 (50音順)

#### 5 事務局

教 育 長 小林通昭  
 生涯学習課長 中村文好 (箕輪町郷土博物館 館長—20年9月まで)  
 唐澤清志 (箕輪町郷土博物館 館長—20年10月より)  
 同文化財係主幹 赤松 茂 (同 学芸員)  
 同副主幹 有賀一治 (同 学芸員)  
 同副主幹 柴 秀毅 (同 学芸員)  
 臨時職員 中村孝子

### 第3節 調査日誌

- 5月9日 重機にて調査区の表土剥ぎ。  
 5月13日 遺構上面確認作業。溝跡及び畦畔確認。  
 5月15日 畦畔検出及び溝跡内の堆積した砂の除去作業。調査区に2本のサブレンチ設定。  
 5月16日 各遺構の検出及び掘り下げ作業継続。  
 トレンチ1の分層及び断面測量。  
 5月19日 各遺構検出及び掘り下げ作業継続。  
 5月21日 溝跡の掘り下げ作業継続。サブレンチ1の掘り下げ、分層、写真撮影。  
 5月22日 サブレンチ1の断面測量。サブレンチ2の掘り下げ。  
 5月23日 調査区の清掃を行い、遺構検出写真の撮影。  
 5月27日 遺構平面測量の準備。基準点の設定。  
 5月28日 造り方測量にて、畦畔遺構の平面測量。  
 5月30日 畦畔遺構の平面測量。  
 6月2日 畦畔遺構の平面測量。  
 6月4日 畦畔遺構の平面測量。溝跡箇所の基準点設定。  
 6月5日 各遺構の平面測量。西壁断面測量。  
 6月6日 溝跡の平面測量。遺物の取り上げ。  
 6月9日 溝跡の平面測量。  
 6月10日 溝跡の平面測量。  
 6月11日 サブレンチ2の分層、測量、写真撮影。溝跡の平面測量。  
 6月12日～ 整理作業。



## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地形と地質

箕輪遺跡のある箕輪町は、伊那盆地の北部に属している。伊那盆地は一般的に「伊那谷」と呼ばれている。それは次のような理由から来ている。

伊那盆地は、中央・南の両アルプスに囲まれて南北に細長い形をしているが、長野盆地や松本盆地などと比べると盆地内の扇状地堆積物の厚さが薄く、段丘崖によって山地変換線から盆地中央部の盆地底まで階段状の地形をしている。その盆地底から、天竜川両岸の山までは、まさに「伊那谷」というべき独特の景観をしている。

以前は伊那盆地を作りあげている盆地底まで続く階段状の地形は、天竜川によって造られた河岸段丘と考えられていたが、現在では地形の研究が進み、河岸段丘ばかりではなく、活断層の影響で盆地の中央部まで階段状の段丘崖が続いている構造盆地であることがわかつってきた。



上空より遺跡地を望む（平成 18 年撮影）

伊那盆地の盆地内部には伊那谷中央断層と呼ばれる断層があり、中央低地帯と呼ばれる盆地底を形成している。天竜川はこの中央低地帯を流下していく冲積低地を作っている。箕輪町を含む上伊那北部では、天竜川本来の段丘はこの中央低地帯に沿って形成されていて、最低位段丘には天竜川によって運搬されたとみられる円礫層が載っている。この面は2万年前の最終氷期最寒冷期の氾濫面に相当すると考えられる。

町の南部、天竜川西部の冲積低地に広がる箕輪遺跡は、隣接する南箕輪村塩ノ井地区まで、およそ100ヘクタールの大遺跡として捉えられている。しかし、遺跡の地形は自然堤防上の微高地、自然堤防東側の氾濫原、自然堤防西側の後背湿地に分けることができる。自然堤防上の微高地は集落域として、後背湿地及び氾濫原の一部は水田として土地利用されていたと考えられる。

また、低地一帯は、段丘下や遺跡内から湧く清水や小河川によって水が大変豊富であり、昭和27年の土地改良事業が行われるまでは、天竜川近くは広くアシ原が形成されていたといわれている。事実、今回の発掘調査地においても現地表面から深さ2mほどの下に、アシとみられる植物遺体が圧縮された状態で見つかっている。

今回の調査地は、氾濫原に埋没した旧河道と堆積される低地に位置している。記録によると、調査地の東部に「古川（ふるかわ）」と呼ばれる旧河道が存在しており、現在の天竜川の河道に至るまでこれまで幾度となく氾濫を繰り返していたことが伺える。この低地の堆積状況は、沼地化によるシルト層と天竜川によるものと思われる砂礫層が重なり合っているのが観察でき、場所によっては何層にも重なり合っている。

現在低地一帯は、土地改良によって均一的に平坦な地形が広がっているに過ぎないが、「曾根田（ソネ=長く低く続く嶺）」、「穴田」などと呼ばれる小字名や発掘調査地内の土層観察により、もっと起伏に富んだ地形をしていたことが伺える。

## 第2節 歴史環境

箕輪町は、現在包蔵地182箇所、古墳27基、城跡13箇所を確認し、上伊那郡下においても屈指の遺跡地帯として知られている。

箕輪遺跡は、昭和27年に始まった土地改良事業によってその存在が明らかとなった。工事中ということもあり、発掘調査の実施には至らなかったが、その状況は箕輪史研究会によって克明に記録され、多くの遺物が採取されている。

当事跡は、大清水・小清水・苦谷・馬場・御室田・鐵治屋垣外・城安寺・穴田・渋田・曾根田・久保下等の小字によって区分される。出土遺物は、縄文中・後・晩期土器をはじめ、弥生土器、土師器、須恵器、灰陶器、中・近世陶磁器まで時代の幅が見られる。また、水田經營を裏付ける田舟、田下駄、木製鋤、鋤などの農耕具の他、矢板や数万本に達する木杭が出土している。さらに注目されるのは、大清水地籍から出土した木製人形（ひとがた）・馬形・木串、御室田地籍より多量に出土した高杯を中心とする弥生土器や土師器など、祭祀的用途の強い遺物の出土が特徴的である。

発掘調査の状況は、昭和55～57年に、国道153号線箕輪バイパス工事関連の調査が最初である。特に昭和57年の第3次調査では、水田跡と隣接する道路を検出している。水田は方

形で、木杭を打ち込んで畦畔を造り、水の出入口と思われる施設の存在も確認された。また、昭和58年には、南箕輪村との境にある田中城跡の調査を行ったが、城郭の形態や規模を想定できるような遺構の存在は確認されなかった。平成2年には、木下区公民館建設に伴う大清水地籍での試掘調査では、この近くで土器類、木製人形・馬形・木串が出土していたが、残念ながら遺物及び遺構の検出に至らなかった。また、同年の城安寺地籍における町公共下水道事業終末処理場建設での調査では、中世後半から近世に至る水田跡が検出され、現堤防の築かれる以前の天竜川の河道域にかなり近い場所でも稲作が行われていた実態が確認された。平成4・5年の県道美鷹一箕輪バイパス建設工事関連の調査では、中・近世の2,000本を越える木杭を打ち込み路肩を築いた水路状遺構が検出されている。平成12～15年の長野県埋蔵文化財センターによる国道153号線バイパスの発掘調査では、これまで想定されながらも具体的な場所が特定できなかった弥生時代中期後半及び同後期、古墳時代後期の集落址が検出された。また、本遺跡の特徴として、古墳時代には河道跡低地を中心に水田化されていたが、河道跡が埋没するに従って、微細な凹凸地形の高低差が減少し、水田域も広がってくること



第2図 周辺遺跡分布図 (1:20,000)

第1表 周辺遺跡一覧表

が明らかとなり、水田跡の木芯畦畔もこれまで長野県内で発見されている類例と同じ構造であることがわかった。

次に、周辺の遺跡についてであるが、西方の段丘上に連なる遺跡と、北方の帶無川の押出しにより形成された扇状地に遺跡が分布する。まず段丘上の遺跡についてであるが、北より上の林(84)、北城(85)、南城(86)、猿楽(87)と続き、過去に発掘調査が行われ、繩文、弥生、平安時代の集落址の一端を探ることができた。特に、北城遺跡からは、17軒に及ぶ弥生時代後期の住居址群を確認し、段丘下に広がる水田經營が行われた箕輪遺跡との関連性を伺うことができた。扇状地の遺跡については、扇中央部の柴宮(91)、上町(92)、中町(93)、下町(94)、渋谷(95)と続き、扇端部の鍛冶屋垣外(96)遺跡では古墳時代後期の須恵器の瓶等の祭祀関連遺物が一括して出土している。

このように、沖積地の本遺跡とそれを取り巻く遺跡について見てきたが、これまで農耕地と居住域との関連があまり掴めなかつた。しかし、発掘調査による資料の増加と分析・研究が進むにつれて、周辺地域における農耕社会の発展と人々の暮らしの様子が徐々にわかってきた。

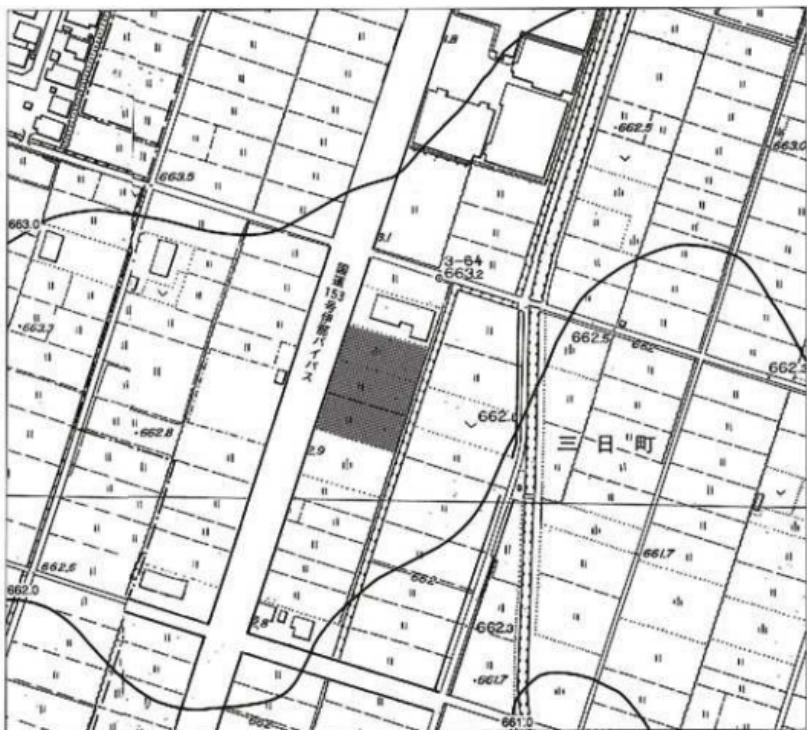
測定 番号	遺跡名	所在地	時代					立地	地図	参考
			旧	新	古事	平安	中世			
96	支輪	木下・三日町	○	○	○	○	○	平地	宅地・畠	
210	田中城	三日町					○	平地	田	調-昭58 司史跡
84	上の林	木下	○	○		○		段丘尖端	宅地	調-昭55~57・60、平3・4
85	北城	*	○	○		○		段丘尖端	宅地	調-昭47、城跡含む
86	南城	*	○	○		○		段丘尖端	宅地・畠・田	調-昭52
87	猿楽	*		○		○		段丘尖端	宅地・道	調-昭49
88	扇路	*	○			○		段丘尖端	宅地・道	
89	天井	*	○	○	○	○	○	段丘尖端	宅地・道	
90	扇路外	*	○			○		原央	宅地・道	
91	柴宮	*				○		原央	宅地・道	
92	上町	*		○		○		原央	宅地	
93	中町	*			○	○	○	原央	宅地	
94	下町	*	○			○		原央	宅地	
95	報告	*	○	○	○	○		田	調-昭	
96	扇路外原	*	○	○	○	○		田	宅地・道	
97	高畠	*	○	○	○	○		田	宅地・道	
154	扇路	三日町	○	○	○	○	○	扇原	道	
155	扇路山	*	○			○	○	原央	道	調-昭54
156	守町	*	○			○		扇原	道	
157	扇路原	*	○			○	○	扇原	道	
158	上扇高畠	*	○	○	○	○	○	合地	宅地・道	
159	扇心寺下	*	○	○	○	○		扇原・央	田	調-昭55
160	天平山	*	○			○		扇原・央	田・田	
161	小学校前	*	○					平地	宅地	
163	道	福寺	○			○	○	扇原	宅地・道	
164	扇路前	*				○		扇原・央	宅地・畠・田	
165	扇心寺	*	○			○	○	段丘尖端	道・北側公園	扇光跡、城跡含む
166	扇心寺前	*	○			○	○	扇原・央	宅地・道	
167	扇の木	*	○			○	○	扇原	宅地・道	
168	扇寺中村	*	○			○	○	扇原	宅地・道	
169	扇寺外	*	○	○		○	○	扇原	道	
170	扇路	*	○					段丘尖端	宅地・道	円海跡含む
171	扇の木前	*	○			○	○	扇原	道・田	
172	北扇井	*	○	○	○	○		段丘尖端	宅地・道	
173	扇の木	*	○	○	○	○		段丘尖端	宅地・道	
174	扇路前	*	○	○	○	○		段丘尖端	道	
175	扇の木	*	○	○	○	○		段丘尖端	道	調-昭61
176	扇心寺	*	○	○	○	○		段丘尖端	道	
177	矢田	*	○	○	○	○		段丘尖端	道	
178	扇の山	*	○	○	○	○		段丘尖端	道	
179	扇路	*	○	○	○	○	○	原央	宅地・道	調-昭52
180	扇寺大倉	*	○	○	○	○	○	原央	宅地・道	調-昭53
181	扇井	*	○	○	○	○	○	扇原	宅地・道	調-平4
182	扇の木	*	○			○	○	扇原	宅地・道	
183	扇寺前	木下		○				段丘下	宅地	
205	扇心寺前	三日町	○			○	○	扇原	道	調-昭57
206	おじょよし根古墳	*		○		○		扇原	道	
208	大扇寺前	福寺		○		○		段丘尖端	宅地	
211	扇路	木下						段丘尖端	宅地・林	町支跡

# 第3章 発掘調査の結果

## 第1節 調査方法 (第3・4図)

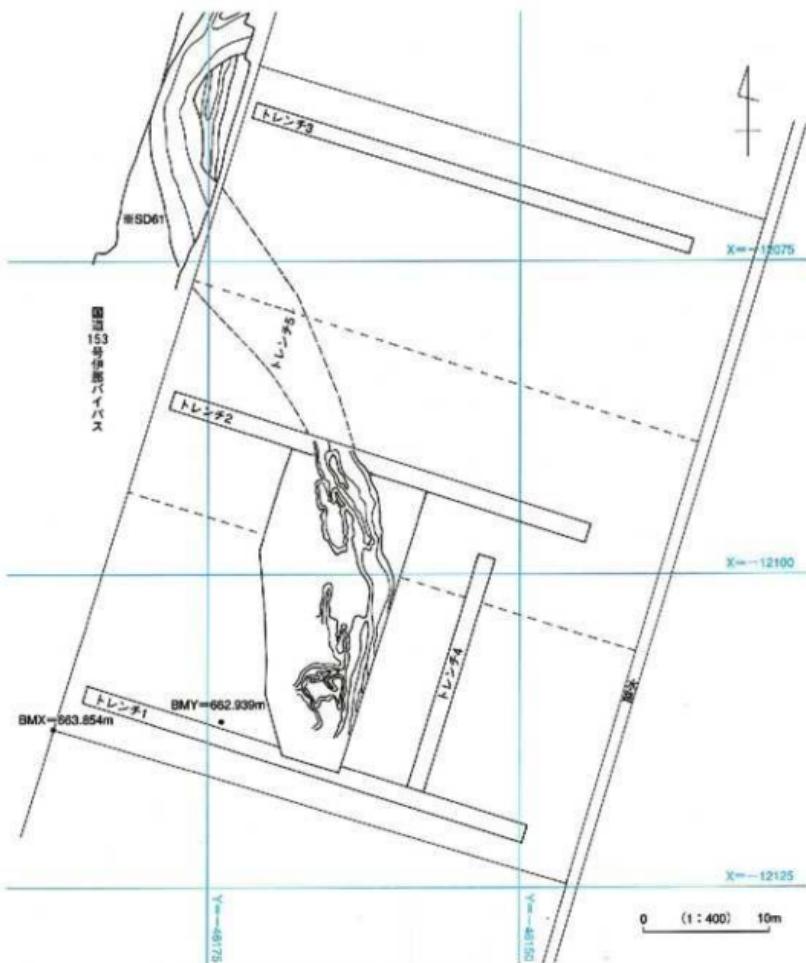
今回の調査に際し、事前の試掘調査を実施している。調査は、遺構の有無と内容確認するため、開発用地内で4本のトレンチを掘削した。その結果、トレンチ3の西端とトレンチ2の中央部において、横板や杭を用いた畦畔遺構と粗砂及び細砂で埋まつた溝跡を検出した。また、畦畔遺構を被覆する暗褐色土層内と、溝跡から古墳時代後期を中心とする土器片の出土がみられた。これらの遺構は、隣接する平成12年度に実施された国道153号線伊那バイパス建設工事関連の発掘調査で検出した、水田面とその関連遺構と共に通する特徴が見られ、それが南部へ継続する遺構であることがわかった。よって、この結果を踏まえて、遺構広がりが予測されるおよそ750m<sup>2</sup>を本発掘調査の対象とした。

作業手順としては、まず大型重機により遺構確認層直上まで土を除去し、続いて人力による遺構検出（上面確認及びトレンチ掘削）作業を進め、検出した各遺構の掘り下げを行った。遺物の取り上げは、各遺構の覆土中の土器片は層位ごとまたは一括取り上げとし、比較的器形の判別可能な遺物は番号を付けて記録作業後に取り上げた。



第3図 調査範囲図 (1:2,500)

測量による各遺構及び遺物出土状況の記録作業は、平面図は簡易造り方測量とトランシットの併用による1:10縮尺で作図し、土層断面図は1:10または1:20の縮尺で作図した。測量作業における座標及び方位は、トータルステーションを使用し調査地全域を世界測地系の基準線を重ねて記録した。写真による記録は、35mm一眼レフカメラで、モノクロ及びカラーリバーサルフィルムによる撮影を行った。また、必要に応じて6×7カメラでカラーリバーサルフィルムでの撮影と、一眼レフデジタルカメラでの記録も行っている。なお、本報告書に掲載している遺物写真については、一眼レフデジタルカメラにて撮影した。



\* 「国道153号伊那・松島バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書」箕輪遺跡 2005より引用・再トレス

第4図 調査区・トレンチ設定図

## 第2節 土層堆積状況（第5図）

町教育委員会が、これまでに実施してきた調査データを基に、(財)長野県埋蔵文化財センターが実施した国道153号線伊那バイパス関連調査でのデータを合わせ、本調査地の堆積層の分層とその把握を行った。基準となる土層は、トレンチ2(A-A')及び調査区南部壁(C-C')での記録によるもので、基盤が砂疊層(第9層)となる河道状低地に堆積した黒褐色及び泥炭質シルト層で、以下のとおり8分層された。今回、面的に遺構の検出を目指した層位は、上記調査結果によるE低地第3面(水田跡)の土質の特徴も類似し検出レベルもほぼ同じであった第4層である。なお、1面については、該当する層位が照合できず、また2面は第3層が該当となるが、面的遺構の検出が困難であったため調査除外とした。

第1層：暗褐色の現水田の耕土である。20cm前後の堆積状況が調査区全域で確認された。

第2層：暗褐色シルト層で、土地改良時の整地された人為的堆積土層の可能性が高い。

第3層：黒褐色シルト層で、粘性・締まりとともに強く、1号杭列が伴う。水田跡第2面に該当。

第4層：暗褐色粘土質シルト層で、粘性・締まりとともに強い。古墳時代後期土師器、弥生後期・中期後半土器片を包含する。畦畔を形成していた横板や杭は、本層下部から5層直上より出土し、横倒しとなった杭や木片もまばらに含まれている。本層は、溝跡周辺ではその堆積を認められない。水田跡第3面に該当する。

第5層：灰黄褐色砂疊層で、粘性はほとんどなく締まりは強い。

第6層：褐灰色粘土質シルト層で、粗砂が多く含まれる。粘性・締まりとともに強い。

第7層：褐灰色粗砂層で、粘性は弱く締まりは強い。

第8層：褐灰色粘土質シルト層で、6層より粗砂を含む割合が高い。粘性は強いが締まりは弱い。

第9層：砂疊層。河道状低地の基盤層と思われる。



調査区南壁土層堆積状況（北東より）

## 第3節 遺構と遺物

### 1 第3面水田跡（第5図）

今回、プラントオバール分析は実施していないが、長野県埋蔵文化財センターでの調査において分析した結果と照合し、第4層にあたる暗褐色粘土質シルト層を水田耕土層として捉えた。河道状低地の西側縁から低地内東部方向にやや落ち込みながら低く堆積し、およそ標高 662.00 m付近で確認された。調査では、低地西部の縁付近を除き、上層との境界が不明確であり、バックホーでの除去段階で削り過ぎたが、溝跡の上層及びその周辺部には本層の堆積がなく、溝の稼働時に浸食された可能性が伺える。

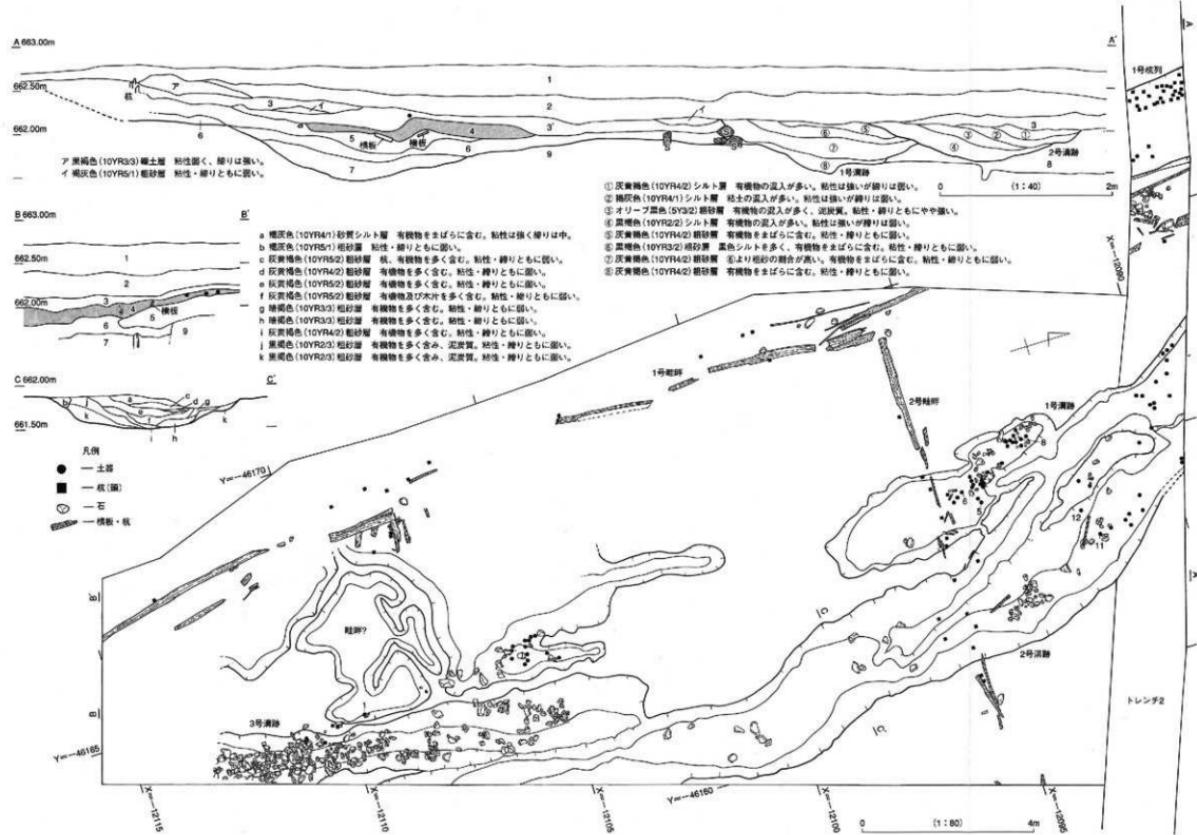
**畦畔遺構：**本層水田跡の区画を示す、芯に細長い板材を杭で固定した2条の畦畔遺構を検出した。

1号畦畔は、低地西部の縁に沿ってN-175°-E方向にはほぼ直線上に、26.4mに渡って検出した。当初、低地と微高地の境界に沿うことから護岸施設と捉えていたが、直行する2号畦畔を検出したことで、畦畔と判断した。構造は、ほぼ併行する2条の細長い板材が芯部となり、その内部とそれを覆う盛土によって形成される土手状を呈するもので、その幅0.8~1.0mを測る。板材は側面が上を向く、横倒し状態がほとんどで、それが検出されない箇所も多く遺存状態はあまりよくない。しかし、側縁が上を向く、立てられた板の検出も認められることから、元々はすべてその状態で造成されたと考えられる。更に、散漫な検出であったが、板材とはほぼ併行し接する状況で2条の杭列がある。杭は板材を固定し倒壊を防ぐ補強目的に打ち込まれたと考えられる。また、板材の間には円砾や横倒しの杭が混入しており、畦をより強固にするため意図的に入れられたと考えられる。これらの特徴が、北西部の国道バイパス関連調査で検出したSD 61 土手（畦）とほぼ一致することから、その継続遺構である可能性が指摘できる。

2号畦畔は、N-89°-E方向に1号畦畔にはほぼ直行して造成され、規模及び構造の特徴に差はない。但し、溝跡及び隣接する溝の氾濫によって砂が堆積した窪地と切り合う箇所では板材ではなく、杭は溝跡と



第3面水田跡及び溝跡出土状況（南西より）



第5図 第3面水田跡・溝跡平面図、土層断面図

窪地の下部に、かろうじて杭の基部とそれが抜けたと思われる数個の穴があり、溝の稼働段階で浸食または流出してしまったのであろう。よって、本水田は溝の稼働以前の耕作層と考えたい。

遺物（第6・7図） 弥生中期後半の壺（16）、甕（18、20、25）が、古墳時代後期の碗（3）、壺（2・4）が出土したが、すべて破片で少量である。木器は、畦畔の構築に用いられた板材と杭（29）を主体に、建築材？（30）や側面に加工痕のある用途不明の棒状木器（31）なども出土している。

## 2 溝跡（第5図）

河道状低地のはば中央を併行し、第4層を浸食する状況で3条の溝が切り合う。覆土は、砂層と有機物を含む泥炭層の互層である。各溝跡から出土した遺物の時期には大きな差はない、稼働時における流水の強弱により浸食と氾濫を繰り返した結果、流路が変化したために切り合った様相を呈していたものと想定でき、本来は1条からなるものであろう。流路は、確認箇所からN-15°-E方向に13m南流し、西に屈曲してN-172°-E方向に8m進んで調査区外へと抜けていく。幅は、1・2号溝跡で2.0~2.3mで、3号溝跡は0.8~1.6mを測り一定していない。また、1・3号溝跡の西側脇の窪地には部分的に氾濫を示す砂の堆積が見られ、底面に堆積した砂や礫の中から土器片が出土している。3号溝跡からは、目立って拳大から人頭大の円窪が底に近いレベルで堆積している。流路の方向や護岸調整などを示す人工的な造作の痕跡が確認できないため、水田經營に関わる水路ではなく、自然流路と考えてよいものと言える。これも、規模及び構造の特徴が類似する国道バイパス関連調査で検出したSD 61（溝跡）が、南西方向に蛇行して本調査区に継ぐ同一流路跡と推察する。

遺物（第6図） 弥生中期後半の壺（15・17）、甕（19・21~23・26）、後期の甕（28）が出土しているが、少量ですべて破片である。主体は、古墳時代後期の須恵器の高壺（1）、土師器の高壺（5・7・9・12）、甕（10）、手捏ね（14）などで、比較的器形の判別可能な高壺の出土が目立つ。



1号畦畔（南方より）



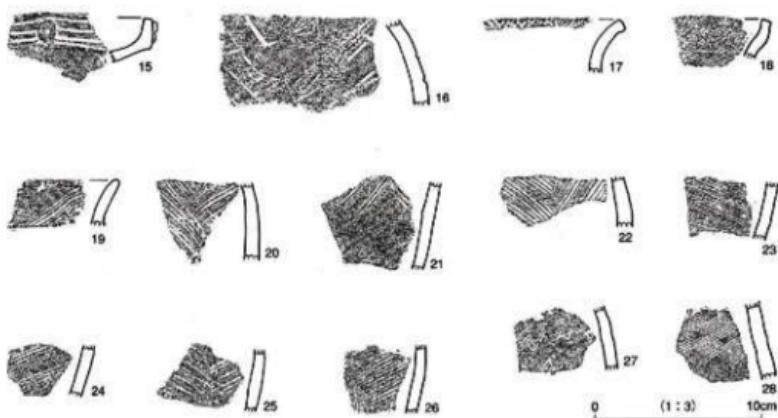
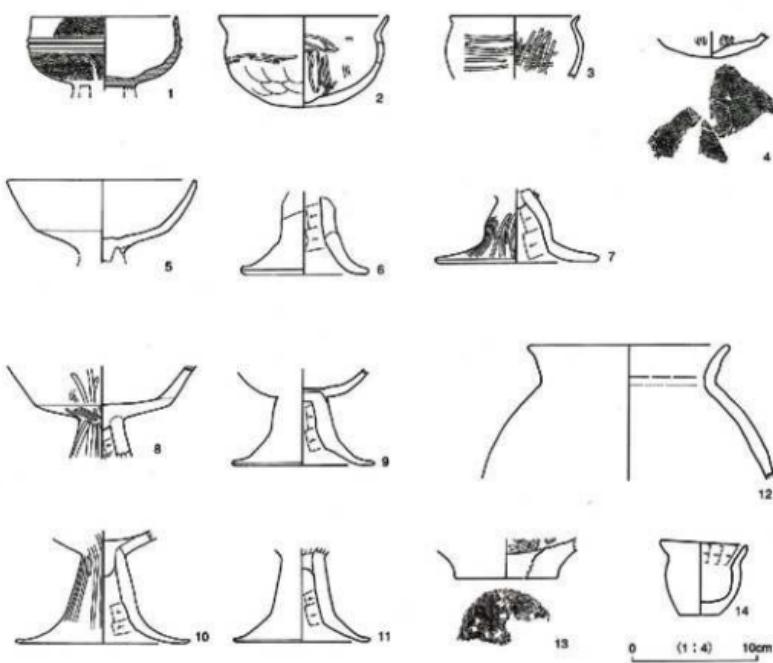
2号畦畔（西方より）



1・2号畦畔接続状況（北東より）



溝跡遺物出土状況（南西より）



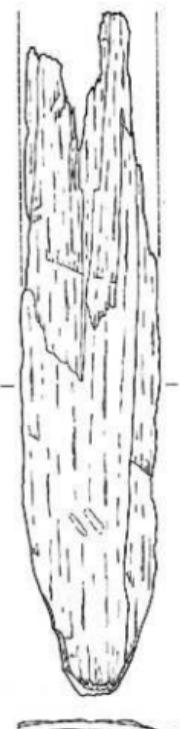
第6図 出土土器実測図、拓影図



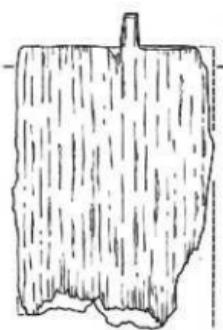
出土土器



出土木器



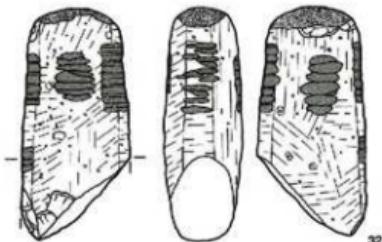
0 (1 : 5) 20cm



0 (1 : 5) 30cm



0 (1 : 5) 31cm



0 (1 : 5) 10cm



第7図 出土木器・石器実測図

第2表 出土土器観察表

法蓋・上より口径 底径 器高

No	種別	器種	法 直	径存底	底部・側面		備考
					輪状成形	色調・胎土・施成	
1	土器	基杯 〔环部〕	11.6 — (5.9)	30%	外側一ロクロナデ 内面一ロクロナデ	N 6 F 0 (灰)	脚部欠損部に長方形の遮し室の痕跡有り
2	土器	杯	(11.4) 丸底 7.3	45%	輪状成形	砂粒を含む 施成良好	2条の施成の下に擦接斑状
3	土器	杯	10.3 (5.1)	20%	外側一ラミガキ 内面一ヘラミガキ	S Y R 5 / E (明褐色)	
4	土器	杯	— 丸底 (2.0)	10%	輪状成形 外側一ラミガキ 内面一ヘラミガキ	S Y R 5 / E (明褐色)	底部ヘラ描き記号有り
5	土器	高杯 〔环部〕	14.9 — (6.5)	30%	輪状成形 外側一ナデ 内面一ナデ	2.5 Y R 4 / 2 (暗灰黄色) 砂粒を含む 施成良好	
6	土器	基杯 〔环部〕	9.7 (6.5)	50%	輪状成形 外側一ナデ、ヨコナデ 内面一ヘラケズリ、ヨコナデ	7.5 Y R 4 / 4 (褐色) 雲母・小礫を含む 施成良好	
7	土器	基杯 〔环部〕	— 12.6 5.8	40%	輪状成形 外側一ラミガキ 内面一ヘラケズリ	10 Y R 4 / 4 (にぶい黄褐色)	
8	土器	高杯 (8.2)	— —	40%	輪状成形 外側一ナデ後ヘラミガキ、開口ヘラミガキ 内面一坪型ヘラミガキ、開口ヘラケズリ	7.5 Y R 4 / 8 (褐色) 雲母・小礫を含む 施成良好	
9	土器	高杯 〔环部〕	11.0 (7.4)	50%	輪状成形 外側一ナデ 内面一坪型ナデ、開口ヘラケズリ	7.5 Y R 6 / 4 (褐色) 雲母・小礫を含む 施成良好	
10	土器	基杯 〔环部〕	13.1 (8.9)	55%	輪状成形 外側一ラミガキ 内面一ヘラケズリ	10 Y R 5 / 4 (にぶい青褐色) 砂粒を含む 施成良好	
11	土器	基杯 〔环部〕	10.6 (7.5)	30%	輪状成形 外側一ナデ後ヘラミガキ 内面一ヘラケズリ	7.5 Y R 6 / 6 (褐色) 小礫・含む 施成良好	
12	土器	曲	15.9 — (10.7)	20%	輪状成形 外側一ナデ 内面一ナデ	7.5 Y R 5 / 4 (明褐色) 雲母・小礫を含む 施成やや良	
13	土器	曲	— 4.0 (3.2)	10%	輪状成形 外側一ハケ 内面一ナデ	5 Y R 6 / 8 (褐色) 小礫・含む 施成やや良	底部4枚の粗底有り
14	土器	曲	7.0 3.2 5.0	100%	手縫ね 外側一ナデ 内面一ナデ後ヘラケズリ	10 Y R 5 / 4 (にぶい黄褐色) 砂粒を含む 施成良好	

第3表 出土木器観察表

番号	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重量	小口形状	備考
1	トレント2	木板	(88.5)	(8.8)	(2.0)	(365.0)	板状	削除部を削り先端部を出しつつ、矢板状を呈する
2	2号柱跡	建築材?	(31.1)	(20.4)	(1.0)	(570.0)	板状	打ち削り法によるみかん削り木材 サワラ
3	2号柱跡	棒状木器	(32.6)	(2.0)	(1.2)	(50.0)	かまぼこ	表面に剥離の痕跡有り

第4表 石器観察表

番号	出土状況	器種	材質	大きさ	幅	厚さ	重量	備考
1	裏面探査	太形鉈刀石斧	玄武岩	(13.6)	6.5	4.3	(710.0)	刃部欠損後、頭部が嵌石に転用か? 使用及び倒産に柄の装着目的の傷状の溝が削まれる。

# 第4章 総 括

今回の調査は、河道状低地にて展開した水田跡と溝跡を検出し、隣接する国道バイパス調査箇所での同低地内検出遺構との継続状況を確認することができた。限られた調査範囲ではあったが、大きな成果を得られたと言える。

水田跡に構築された畦畔は、細長い板を一定幅で2列に配した木芯畦畔であり、低地の縁にはほぼ沿った配置は、低地と微高地との境界を明確にする意図も感じられる。また、それに直行する同じ構造を持つ畦畔が確認できたことは、低地全域を耕作地と想定した場合の大区画水田を示しているのではないかろうか。また、その内部における小区画水田の状況は、調査方法の誤りもあって明確に確認できなかった。しかし、砂が堆積した窪地がその痕跡であり、また調査区南部で検出した本層直下層のわずかな凹凸は、上層での区画を示す痕跡とも想定できる。次に、水田の年代であるが、遺物は弥生時代中期後半・後期、古墳時代後期の土器片が少量ながら出土しているが、古墳時代後期に時期がほぼ特定される溝跡との切り合いで、水田が浸食された状況を考慮すると、弥生時代との見方が妥当なのか。また参考ながら、県埋蔵文化財センターによる隣接箇所で検出した木芯畦畔木材のC 14年代測定結果では、AD 1世紀前後と判定され、出土土器との年代とほぼ一致している。

溝跡は、出土土器の様相から、低地内の最も低い箇所を流れた古墳時代後期の自然流路跡と考えられる。しかし、土器の出土量は決して多くはなかったが、全体的に高窓の占める割合が高く、西に隣接する微高地に展開した集落からの流入物または廃棄物にしては、甕や壺などの日常品が少ないと見受けられる。祭祀関連の特定される行事後の廃棄場となっていたのであろうか。

最後になりましたが、調査の進行並びに本報告書の作成にあたり、ご指導ご協力をいただいた各関係者の方々をはじめ、文化財保護に多大なご理解とご協力いただきましたプリヂストン長野販売株式会社様に、本書の刊行を持ちまして厚く御礼申し上げます。

## 参 考 文 献 (著者名50音順)

- |                 |  |
|-----------------|--|
| 市川聰三            | 1954 「近世天竜川の治水 伊那郡松島村」『語りつぐ天竜川』建設省中部 地方建設局<br>天竜川上流工事事務所 |
| 大場豊雄            | 1964 「上伊那郡並輪町発見の祭祀遺物」『伊那路8-1』                            |
| 木下区説編委員会        | 1999 「木下区説」  |
| 小池修兵            | 「箕輪遺跡第3回の報告にかえて」『伊那路2-5』                                 |
| (財)長野県埋蔵文化財センター | 2005 「国道153号伊那・松島バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書」箕輪町内一箕輪遺跡一             |
| 信濃毎日新聞社         | 1986 「ふるさと地理史図 伊那谷」                                      |
| 長野県教育委員会編       | 1990 「歴史の道調査報告書X X X 一天竜川一」復刊者 (社)長野県文化協会                |
| 長野県史刊行会         | 1968 「長野県史考古資料 第1卷(4) 遺構・遺物」                             |
| 藤沢宗平            | 1955 「長野県上伊那郡箕輪遺跡について」『信濃第7卷2号』信濃郷土研究会                   |
| 箕輪町教育委員会        | 2005 「箕輪遺跡」第14・15次緊急発掘調査報告書                              |
| 南箕輪村教育委員会       | 1993 「箕輪遺跡」坂ノ井中田地区                                       |

## 報告書抄録

ふりがな	みのわいせき						
書名	箕輪遺跡						
副書名	平成 20 年度タイヤ館建設工事に伴う埋蔵文化財第 23 次緊急発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
著者名	赤松 茂 横橋とし子						
編集機関	箕輪町教育委員会						
所在地	〒 399-4601 長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪 10,291 番地 代田 0265-79-3111						
発行年月日	2009 年 3 月 27 日						
所取遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯 度 緯度番号	東經 度	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
箕輪遺跡	長野県 上伊那郡 箕輪町 大字三日町 954 番地 1 号	20383	98	35° 53' 12" 137° 59' 30"	2008.3.6 ~ 2009.3.27	2,246	店舗建設工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
箕輪	生産遺跡	弥生時代 古墳時代	水田跡 耕作 溝跡	木器(杭、建築材、棒状木器) 弥生土器(盃、甌) 土師器(高环、坏、甌) 須恵器(高环)	木芯畦畔を伴う水田跡の検出。		
要約	長野県埋蔵文化財センターが実施した、国道バイパス工事関連調査で検出した水田跡の概況状況が確認できた。						

### 箕輪遺跡

平成 20 年度タイヤ館建設工事に伴う  
埋蔵文化財第 23 次緊急発掘調査報告書

発行日 平成 21 年 3 月 27 日

編集者 箕輪町教育委員会

印刷 株式会社プリンティニアカヤマ

〒 399-4511 長野県上伊那郡箕輪町神子柴 7731-1  
TEL 0265-72-2257 FAX 0265-72-5155